



香
花
香



特別

抱一其一其明筆

明治
40 9 19
丙午



四季の花
春

會社名
芸州堂書行

為
心
此
也



神

鐵齋外史



序

酒井抱一上人も雅楽頭忠舉朝臣の男あつたの思ふとあり
 て家を出で専ら画道志をもよせし人ありその初は歌川豊
 春の門に入りて浮世繪を學びしその後光琳風を慕ひて終つた
 技を大成せりそも光琳風とももと本阿彌光悦より出づる
 一種の画風なりて有職故實を尋ねし土佐派に習ふものあらず
 漢画の氣韻を貴い水雲を味しし狩野派にもれりうゝあらず
 宇宙の森羅萬象を悉く模倣化せむし獨得の画風あり
 蓋し世界未嘗有とすんべしとのたまふ生理學の行も學
 ばざれば人物を画くこと難きものなりといひる善權畫といへども
 の根本を究めおのれいひて線の活動を見よとを得べき上人
 といふ悟りありその曾て四季の花弁の寫をとりし尤も濃色の
 いろり成しもの數百種ありし門人鈴木其一の遺言と
 補ひて帖を成したるを近きころ岸光景氏更に同流の中野
 其明と補ひしあり凡そ千種もの一年たりこれと珍蔵しし
 うもろり貴重の帖を徒らに一家に秘めおんを寶と埋めお
 ころ均しはそ世にびて画家工祝家等と益せしんやと
 例の山田益州を請らるるごとく橋本ふ白をすしとるし

余のその序を乞ふ余素よりその道に在りては
いづれをも其の画家と稱せざるの貴重なることを現
得しやた先輩の苦心のつらさを思ふらば今の
青年画家たちのもすれば皮想の研究に止まりて根本を
急ぐのいふものありて戒むるす誠を以て其の緻密を
寫すありて後彼の自中より描様画成りしもの正直を寫せ
ありて後彼の放縱する描様画成りしものと本を究むる
末のいふきりもいふものいふ省もいふせんやいふもの
上列したる画家と稱せざるの参考とするものとす國畫の
教育上尤も益ありていふべしなりとせばいふも一言を序
とすべしなり

明治四十年初夏

藤園池邊義象

山房主人啓

APR 18 1891
MUSEUM OF COMPARATIVE ZOOLOGY
CAMBRIDGE MASS

































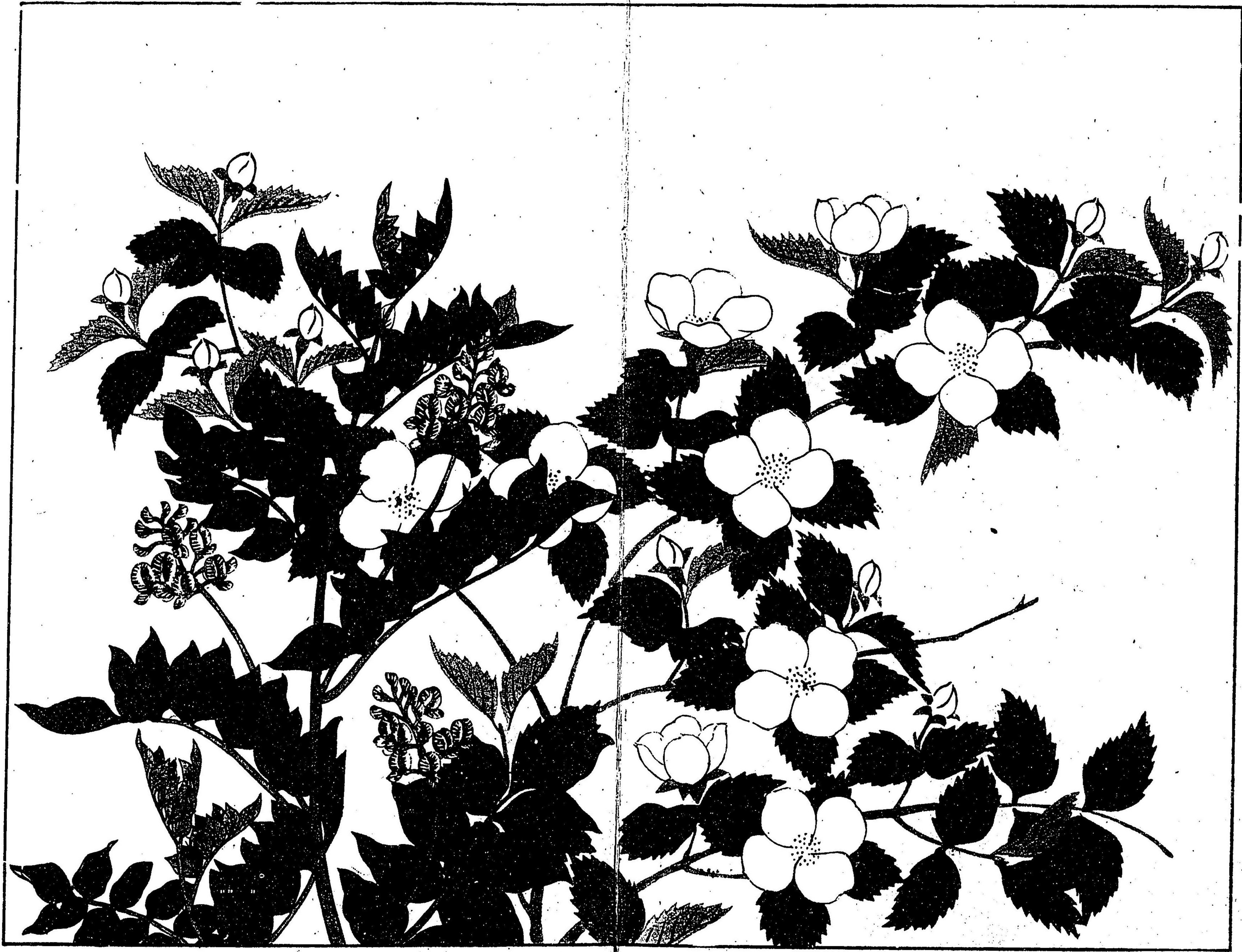


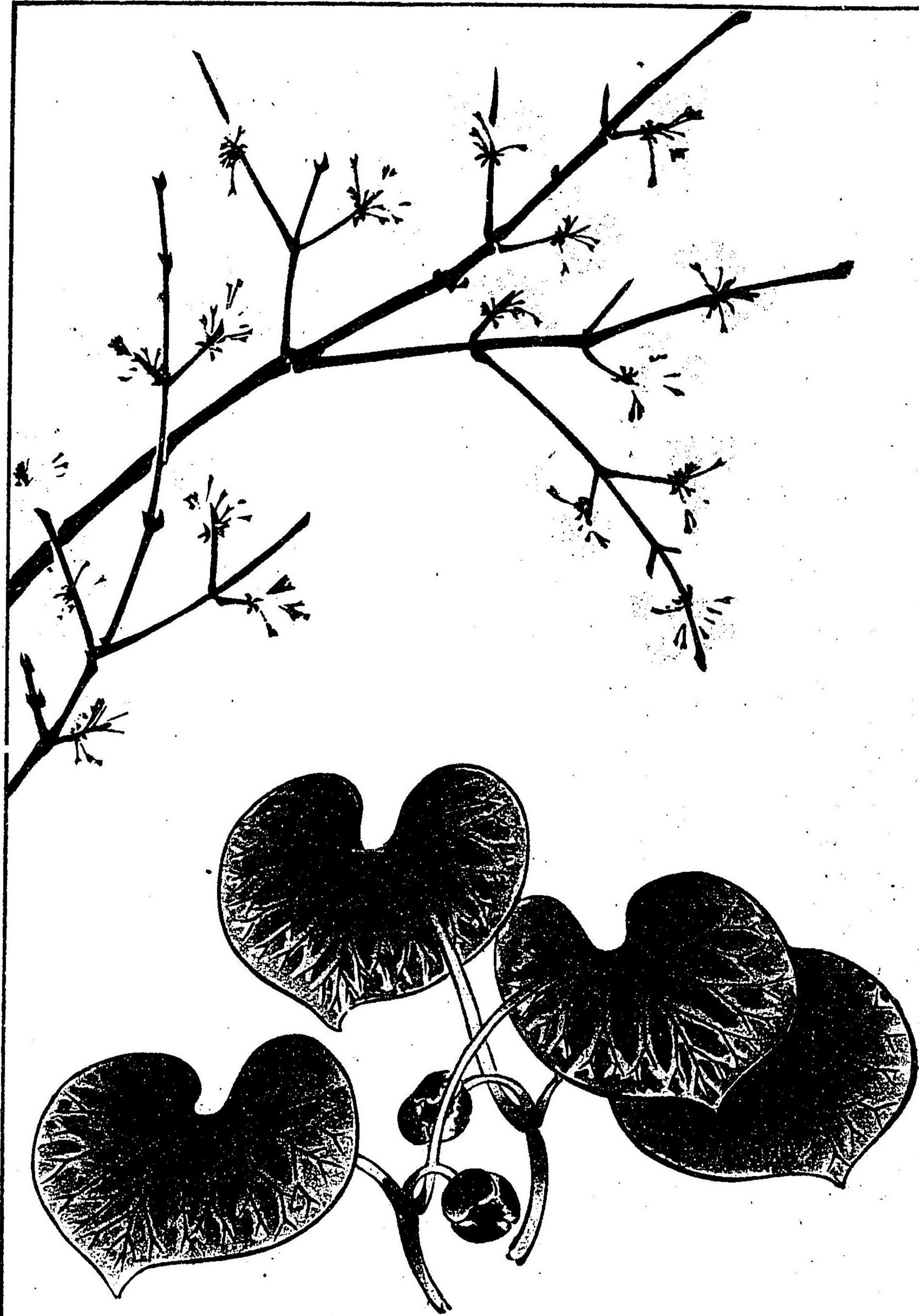








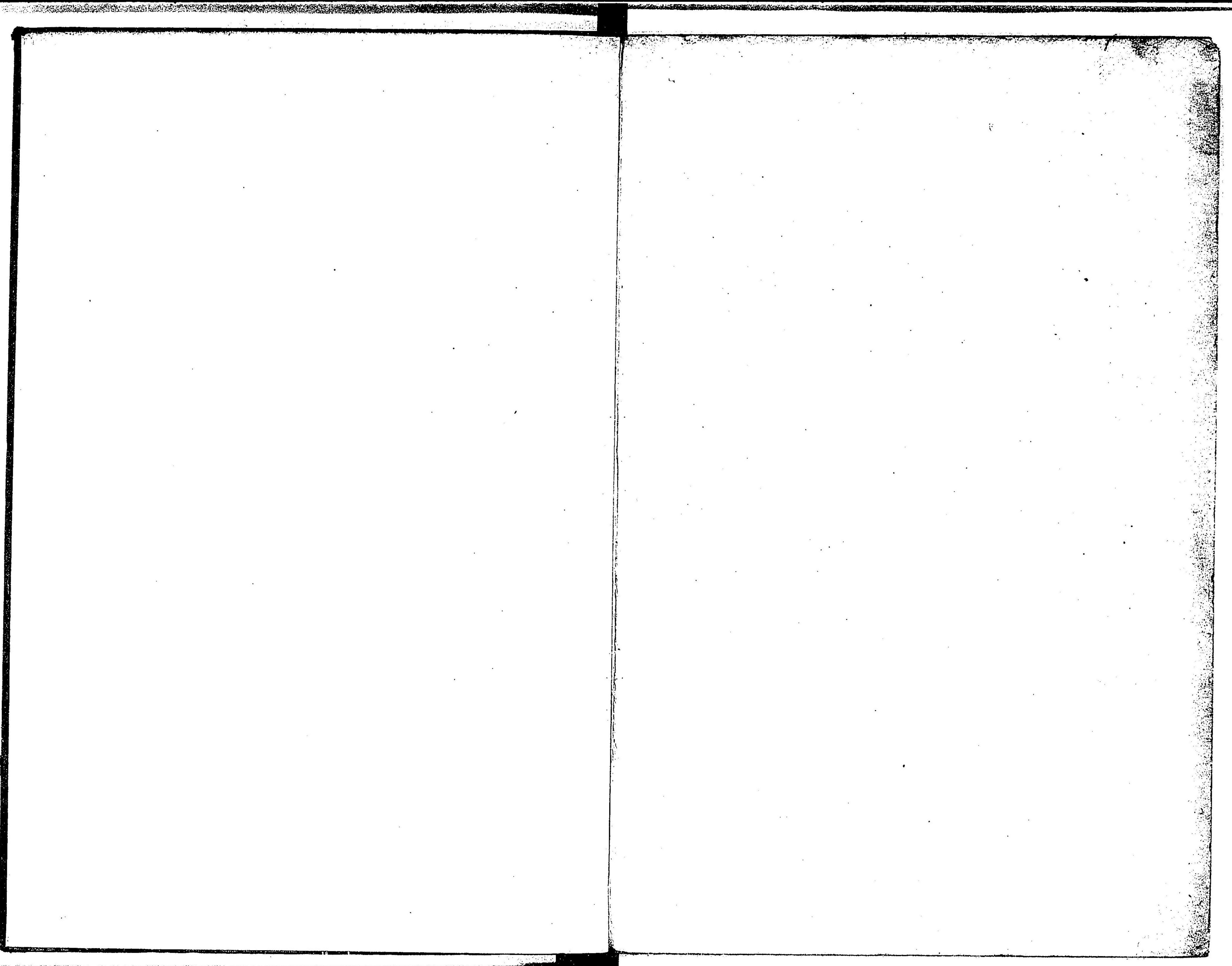




280









204462-001-7

213-437

四季の花

酒井 抱一 / 等画

M41

EDS-0115

